

<研究ノート>

ある事例を通した世代間連鎖の考察
— マズローのヒューマンニーズの階層からアプローチ —

打田 信彦

Consideration of the intergenerational chain through a certain example
— Approaches from the Maslow's Hierarchy of Needs —

Nobuhiko UCHIDA

Child-parent relationship is the most familiar subject and is an alluring subject for the party concerned. However, if it considers on the theme of human welfare, it will appear frequently as an actual problem to face a supporter's own subject. I myself was the same. I would like to grope here about the positive consciousness which considers an intergenerational chain, and also severs a chain, and challenges original self-actualization.

Keywords : child-parent relationship, intergenerational chain, specific fosterer, attachment theory, Hierarchy of Needs

Key words : 親子関係 世代間連鎖 特定の養育者 愛着理論 ヒューマンニーズの階層

はじめに

親子関係は最も身近な課題であり、当事者にとっては悩ましい課題である。しかし、人間福祉をテーマに考察していくと支援者である自身の課題に向き合うことが現実問題として度々登場する。筆者自身も同様であった。ここでは世代間連鎖について考察し、更に連鎖を断ち本来の自己実現に挑戦する前向きな意識について模索したい。

第一章 特定の養育者について

1. 社会的養護

社会的養護は子どもの自立支援を目的とし

て、施設養護と家庭的養護（里親等は家庭養護と呼称する）がある。里親の種類には養育里親（専門里親）・親族里親・養子縁組を前提とする里親がある。養育者は子どもの最善の利益を考慮し子どもに寄り添い共に成長していくことが大切で、それが子どもに良い影響を与える。

また、1950年代ホスピタリズム論争の中で、特定の養育者との愛着関係が子どもの養育にとって最も重要であると唱えたボウルビイの愛着理論は、社会的養護に携わる者に力を与えてくれるものである。

ボウルビイの愛着理論は、愛着とは、食事や生殖と同じくらい生存に必要な生物学的衝動であり、また乳幼児期のみならず生涯を通

して私たちの行動を形作るものだ述べている。この事実は、精神療法にきわめて重大な影響を及ぼすものと言える⁽¹⁾と、養育者との関係性について記述している。また、養育者との関係では、不安感情の調整で子どもは自分の感情を自分で調整することはできず、養育者との関係を通して発達的に感情を知り調整する能力を獲得していく⁽²⁾とし、養育者に気持ちを落ち着かせてもらった経験の積み重ねが感情調整能力の発達や本当に必要な時に助けを期待出来ることにつなげる⁽³⁾、としている。逆にいうとすぐに切れて暴力的になったり、必要以上に不安に圧倒されたりする状態は、感情を調整する力の問題でありアタッチメントの問題が背景に考えられる⁽⁴⁾のである。こうしたことは施設養護に従事した経験を持つ筆者も度々体験している。

2. マズローのヒューマンニーズの階層

マズローが述べているように、人間には生理的欲求、安全の欲求、所属と愛、承認の欲求、自己実現の欲求の5つの基本的階層がある。しかし、個人は統合され、組織化された全体であり、一つの行為、あるいは意識的願望が唯一の動機づけしかもたない、ということは普通にはありえない。言い替えれば、一部分ではなく全体として人間が動機づけられる⁽⁵⁾。人間は、人類に普遍で、発生的あるいは本能的起源をもつ無数の基本的欲求によって動機づけられている。これがマズロー独特の理論的見解における基本的概念である。欲求は、また単に身体的なものではなく、むしろ精神的なものである⁽⁶⁾。愛などのような複雑な欲求に関しては確かに真実を示している⁽⁷⁾。今回の本事例の中心テーマは、心の充足であり、所属と愛から承認の欲求を強く求めている。

生理的欲求は、人間のすべての欲求の中で

最も基礎的で強力であり、はっきりしているのは、生命維持に関する欲求であるということである。すなわち、食物、飲物、保護、性、睡眠、酸素への要求である。

たとえば、食物、自己承認、愛などを欠いている人間は、まず第一に食べ物を要求し、この欲求が満たされるまでは他の一切の欲求は無視されるか、あるいは背後に追いやられてしまうであろう⁽⁸⁾。不良行為等をした児童を対象とする児童自立支援施設では食事指導に重点をおき、とりわけ、腹一杯食べることによる満足感には留意している。これは石井十次の岡山孤児院での実践十二則の一つ「満腹主義」に通じるものである。また、心の満たされていない者はいくら食べても満腹感が得られない。満腹することで安心感を得ようとするからである。安全の欲求は、生理的欲求が、十分に満足されると現れ、子どもはその次の段階として安心し安定する。反対にこれらの要素がないと子どもは不安を感じ、安定感を失ってしまう⁽⁹⁾のである。

生理的欲求と安全の欲求が満たされると、次は愛・所属の欲求が現れる。ところが人間は、他の人々との愛着関係、言い替えれば自分のいる集団の中で一つの位置を占めることを渴望するのが普通である。マズローのいう愛とは二人の人間が、信頼で結ばれ、健康な、愛情に溢れた関係を言っているのである。良い人間関係には不安もなく、また防御もないものである⁽¹⁰⁾、これらを通して考えてみると、乳幼児のかかわりの重要さが理解される。

承認の欲求では、十分な自己肯定感をもっている人間は、自信があり、有能で、生産的であるといえる。ところが自己承認が不十分であると、人間は劣等感や無力感を抱くことになり、結果、絶望したり、神経症的な行動を起こしたりする⁽¹¹⁾ことがある。

3. 育ちに合った対応の必要性

2010（平成22）年の児童相談所の虐待相談対応件数は、5万5152件あり、件数は年々増加している。このことから、子どもがおかれている現実の厳しい状況が伺える。

その中身をみると実母による身体的虐待・ネグレクトが多い。これは実母が子育て支援を求めている姿であると読み替えることが出来る。私たちは若い母親による乳幼児虐待が何を意味するのか、真剣に考えなければならない。2010年、大阪市の若い母親が2児を放置し餓死させた事件では懲役30年の地裁判決が、2012年3月16日にあった（上告2012年3月28日 朝日新聞）ことについて（京都新聞3月17日付）立命館大学の野田正人教授が「幼児期に満たされない思いで過ごした人は、SOSも出さずに無理にでも自らの手で子育てしようとする傾向がある」と指摘した。このように支援が必要な人が支援を求めない現実が見られるのである。アウトリーチ（訪問支援）が求められる所以である。

新保育所指針（2008年3月28日告示 2009年4月1日施行）では、子どもと家族、地域の子育てを応援するという考えを強く打ち出した。その背景には子どものおかれているこうした厳しい状況がある。

国は社会的養護の中で、里親制度とファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）を家庭的養護から家庭養護と呼称するとしている。家庭的養護は地域小規模児童養護施設、小規模グループケアの分園型、本体施設での小規模グループケアとなる（福祉新聞2011年01月23日）。一方、里親制度は欧米においては、一般化したシステムであるが、日本の社会では生活スタイルや住環境の問題等があったか、なかなか難しい課題であり、里親のグループホームも同様にこれからの課題である。里父・里母が一つの職業として社会的養護の一

端を担うシステムづくりは福祉の積極性を考えると当然、必要であり、今後日本において児童福祉の大きな課題といえる。さらにアメリカの里親事情¹²⁾を見ると子ども福祉に携わる者には、「生きる知恵」と「福祉の心」が求められていることが分かる。アメリカの里親の積極的なかわりには学ぶものが多い。

社会的養護とは単に子どもを保護しているわけではなく、養育者とかかわりを求めている。重要なのは「誰が」より「どうかかわるか」、すなわち養育・保育の質であり、子どもをよくみて理解し、それに応答的にかわることであり、それが子どもの積極的に生きる意欲と力を触発しその育ちを活性化させる。この養育の質こそが子どもとかかわる特定の養育者に求められる条件¹³⁾なのである。

本事例では3歳という年齢で養子縁組により安全・安心の欲求、所属と愛を失い結果として自己肯定感が不充足なままに育ったのが始まりといえる。この事例を通して特定の養育者の子育てについて考察する。

これは世代間連鎖を内包している事例である。

特定の養育者にとっても養子との信頼関係を構築するのに一定の年齢からかわることの困難さがあり、本事例では養親とかかわりは3歳から始まった。

またこの事例は内容の一部を変更していること。さらに、日本の古い生活習慣が残る戦前から戦後の高度経済成長期という時代背景も意識しなければならないことを記しておきたい。

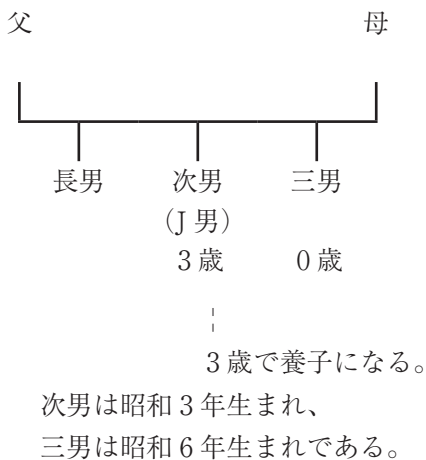
第二章 事例を通しての家族関係の考察

1. 次男の養子縁組

これは昭和6年次男（以下、J男と記述する）3歳の時、子どものいない伯父夫婦の養

子になったことが、生涯大きな心の傷つきとなった事例である。実母によれば「自分から行くといった」といい、親戚ということもあって実家と養子先を行ったり来たりしているのであるから、当初は養子に出したことはそれ程、問題視されなかったと思われるが、成人し結婚する時になって問題が噴出してきた。当時日本における里親、特に養子縁組は、子どものない夫婦が自分の老後を託す意図が多く見られた。そのため、養親夫婦はJ男の結婚に際し、自分等が気に入った嫁でないと将来困ると考えたのだろう。

◇J男の育ちについて



3歳という年齢であったことを考えると、親戚のおじさんから甘い言葉で誘われ、喜んで付いていったと思われる。子どもの気持ちはその時その時に変わるが、子どもは本来、「自分の親がいい、自分の家がいい」ものである。養父は実母の兄で仕事の関係上、島で生活していた。

(注) そうしたこともあってか、

J男は釣りを趣味にしていた。

◇経歴

高等尋常小学校時は、ガキ大将だった。

(注) 養子先で習字を習う。当時、習字が習える家庭は生活にゆとりのある家庭であった。

旧制中学校入学 —

希望した中学不合格で志望校変更する。

(注) 弟の三男はその後、旧制一中へ入学
J男として屈辱的な体験となる。

突然、中学3年で予科練へ

(注) 予科練とは海軍飛行予科練習生のこと。
大日本帝国海軍における飛行兵養成制度の一つで志願制である。

これは人生の大きな選択だが現実逃避とも取れる。予科練の訓練はたいへん厳しいものであった。

その辺の人間としての思いを哲学者の木田元は、朝日新聞（2012年4月3日付）の『春の旅立ち「風の色」』に記述している。「もうはるか昔の話である。第二次大戦敗戦の四ヶ月ほど前、つまり1945年3月末のことだ。16歳で旧制中学を卒業した私は、広島・江田島の海軍兵学校に入学するために、当時暮らしていた満州国の新京を旅立とうとしていた。」「あの戦局では、むしろ軍籍に入る私の戦死する公算のほうがはるかに高かったのだが、それでも自分は安全地帯に逃げ出そうとしているとどこかで思っていたのだろうか。」「それにしても、あの時感じたあの後ろめたさはなんだったのだろうか。」

どうやら旅立ちといったものには、旅立つ自分は恵まれている、残る人たちに申しわけない、という意識がつきまとうものらしい。後ろめたさは、そうした意識にともなうほんやりした感情ではないだろうか。」と書いて

いる。

訓練中のJ男のところへ実父と三男は、遠方であるのに面会に出かけているが、二人の心中もまた複雑なものだっただろう。

J男は終戦後、高等師範学校に入学する。卒業後の新制中学校に赴任、実父の死後、転勤し、少しの間、実家で生活する。

その後、養父母が決めた女性との結婚を嫌い、養子先と折り合いが悪くなり、養子姓を実家姓に戻し、高等学校に転職する。

J男と幼児期の特定の養育者との親子関係は不十分であった。また、成人し許婚との愛情のない結婚を拒否し自ら選んだ人との、結婚生活の中でも長い間、安定したとはいえず、子育てに影響を与えることになった。

2. 第二子の成長と世代間連鎖について

親が身体や心に問題を抱えており、自分のことばかり心配している状態にあると、子どもはその親からお前の気持ちなんか重要ではない。私は自分のことで頭がいっぱいだからという強いメッセージを受け取る^④ことになる。

本事例では養親の言動から同様なメッセージをJ男は受け、特定の養育者との関係が充足されなかったことが、後々まで影響を与えたことになる。

転居—第一子が育つが落ち着けなかった。

旧家の離れの借家に住み、時には質屋に行っていた様子である。

公舎に転居—同僚等の出入りが激しい。

第二子はよい子で育つ

経済的には徐々に落ち着いてきたが、人の出入りが多く生活は落ち着けず、よく独りで釣りにいった。

子どもと遊ぶことよりも独りになりたかったのだろうか。第二子はJ男と遊ぶことを欲しており、親子のズレが散見された。

J男としてはこの時期、父として自分自身の気持ちの整理と子どもとのかかわりが必要だったし、また、子どもの育ちにとっても父とのかかわりが重要な時期であった。

マズローのヒューマンニーズの階層で考察すると「所属の愛」を求めているといえる。その結果自己実現の段階に達しておらず、親自身が育ちを過去のものにしていないため世代間連鎖という課題が生じた。

J男の美食、酒好きという食へのこだわりは、戦中、戦後という時代背景と食料事情があることも想起されるが、生理的欲求・安全の欲求・所属と愛への欲求という基本的な欲求と重なる。親自身がそういう中で食への関心と所属と愛の間で心がゆれている。

第二子はいわゆる『いい子』で育っているが実際には、親の意志に従って、大学は家から通学し自分の思いと違う学部に進学し就職している。

また、少し早いと思われる時期に第一子と同じ場所で結婚式をあげた。こうしたことから親に取っては扱いやすい、いい子であっただろう様子が伺える。だがJ男は我が子の思いに気づけなかった。

J男（父親）の死に際し第二子は「遊んでくれなかった」と言っている。これは子が父親を求めている時期に、J男は独りで魚釣りをすることで、自分の心を癒やそうとした。ここに親子のズレがあった。「子どもは父親の背中を見て育つ」というが、この事例でJ男は父親として親子のズレを修復できなかった。また、父であるJ男に対して第二子は「もっと出世するのと思った」と言い、父は雲の上の存在であったことが想像される。なぜ二人のズレは埋められなかったのだろう

か。

その後、第二子は離婚、離職を経験しアルコール依存で深酒の後、若くして内蔵疾患で亡くなった。いい子でいたが、J男の死で目標を失い、やっと追いついたという気持ちで本音を語れたがすでに父は亡くなったのである。ここで第二子自身の内部的崩壊があったかもしれない。こうしたことにはJ男の人生と重なり親子間の連鎖が感じられる。子育てとは自尊感情を伝えることである。子どもはもっと親に認めて欲しかったのだろう。これはマズローのいう承認の欲求の充足である。自己実現の欲求に向かうにはその前提の自尊感情を得ることが必要なのである。

「親の考えには従わなくてはならない」という無意識のプレッシャーは、子どもが本当に望んでいることや必要としていることに、必ず重苦しい陰を投げかける。

子どもの育ちにとって、親としてしなければならないことは「自分がして欲しかったことを子どもにする」ことであり、「して欲しくなかったことは子どもにしないこと」である。また、親子の思いにズレが生じたならば親がそのことに早期に気づくことが求められる。そして親の方からズレを修復することが必要となる。

第三章 なぜ、我が子と向き合えなかったか。

子どもは親を見て育つ、親は自分の育ちを前述の木田元は『春の旅立ち』とした。木田のように「そうした経験をした」と過去のものにすることが求められる。本事例はなぜ過去のものにすることが出来なかったか。

J男は過去のものにしようとする科練を選択したのかもしれない。その背景には3歳の別れが遠因としてある。

J男は早期に親の元から離れた不安感が強く

残ったが、結果『愛・所属』が充足されずにいたのではないか。そして子が、強く父親を求めているのに十分な対応ができなかった。

親を怖がっている子どもは自信が持てず、依存心が強くなり「親は自分を保護し必要なものを与えてくれているのだ」と自分を信じ込ませる必要性が増す。⁽¹⁵⁾という状態だったと思われる。自分が小さく無力で傷つきやすかった子どものころに“神”のように強大だった親が、実は自分に害を与えていたのだという苦痛に満ちた真実にはなかなか直面することができない。そういう人間が、自分自身の人生を取り戻すために踏み出さなくてはならない最初の一步は、子どもだった時の真実とはっきり対面するということ⁽¹⁶⁾である。

J男は子どもとしてどこかで養親との対決が必要だったのだろう。結果的にはここから抜け出せず、こうしたことをずっと引きずり、次段階に進めなかったと思われる。

「子々孫々」我が家からは養子に出さないとといったというのが、J男の生活姿勢が子ども(第二子)に強く影響を与えた。子どもはいい子であったが、「父親は遊んでくれなかった」といい、そのJ男に「もっと出世するのかと思った」という。その子どもはまた、親との対決が出来ていない。

親は自分の責任を子どもに押しつけている家庭では、家族のメンバー間の役割の境界線がぼやけ、ゆがめられ、あるいは逆転してしまっている⁽¹⁷⁾。子どもの情緒が発達する決定的に大切な時期に親がモデルになり得ないと、その子どものアイデンティティーは常に安心することのできない混乱の海をさまよってしまう⁽¹⁸⁾のである。

父が過去に養子であったことと子育てに、親子関係の重要さと連鎖の苦しみが見える。

最近の研究によると「家族」というのは単に血縁者が集まっただけのものではなく、ひ

とつの“システム”であることがわかってきている。どういうシステムかというと、一人ひとりのメンバーが複雑に結びつき、それぞれがお互いに根本的な、しかし表面的にはよくわからない影響を及ぼしあう集まりというものの⁽¹⁹⁾である。

こうした親子関係は東日本大震災の子どもの心の傷つきと重なるところがある。

両親を亡くして祖父母と生活し、いい子でいる小学生の事例がある。

祖母との関係で、祖母が特定の養育者になり甘えられている。祖母は大人と子どもとの「良好な関係」が生まれるまで待っていたという。祖母のその対応の確かさに驚くのである。また、別の事例では両親と妻と次男を亡くした父親は、我が子（長男）と二人の生活になった。父親は子どもに「勉強しろ」とよくいうようになった。それは父親自身の不安の表れであり、子どもは親の前ではいい子でいるが、学校でしんどさをもらしている。これはまるで父親の面倒をみているようである。

子ども時代に親子の役割が逆転した人間には非常によく見られる現象である⁽²⁰⁾。だが、子どもにとっては、この“家族というシステム”が現実世界のすべてである⁽²¹⁾。

この事例では学校の先生が子どもの気持ちに気づき、そのことを父親に伝えて、父親は「勉強しろ」ということをいわなくなった。

パール・バック『つなみ』⁽²²⁾にも、子どもの心が落ち着き、生きたいという意欲が出るまで待つことの重要さが語られている。

「危険の真っ只中で生きることはな、生きることがどんだけいいもんかわかるというもんじゃ。」「人は死に直面することでたくましくなるんじゃ。」「わしら日本人は幸せじゃ。わしらは危険の中で生きとるから命を大事にするんじゃ。」という。また、待つことで親

を亡くした子が積極的に生きようになることがこの『つなみ』には書かれている。時間が解決してくれるということがある。もう立ち直れないだろうと思うような体験をしてもこれまで人間は立ち直ってきた。パール・バックはこのことを語っている。人間は待つことが出来るのである。

ソーシャルワークでは、問題行動の背景を考察するが、「子どもの問題行動」はサインと捉えるのである、また、子ども虐待は「実母による身体的虐待」が多いが、これは母親が子育て支援を求めているサインと考える。勿論、子ども虐待は、早期の対応が必要であるのは当然である。

現代社会は私たちが求めてきた豊かな社会のはずだったが、地域の教育力の低下、子どもの貧困・弱者の孤立等、種々の問題が指摘されている。このように人間関係が希薄な社会では「支援を求めている」ということが意識化されていない。孤独死や親の死が子である障害者の死につながっている。それ故、困ったことがあれば助けを求めて良いという共助や共生社会が、現代社会では課題となってくる。しかし、これは古き良き社会に戻るのではなく、新しい共生（ともいき）社会への希求だろう。障害者自立は支援を得て自立することをいい、高齢者自立とはそこから学んだと社会学者の上野千鶴子はいう。人間は生きていく上で多くの課題に直面するが、そうした時、自分の思いを周囲に伝え支援を求めていくことになる。人間として支援を求めているのだという思いを自分自身持つことが大切なことである。